

アポイ岳ジオパーク（再審査） 現地調査報告

現地調査員中川和之 大野希一

主な対応者（敬称略）

坂下一幸（アポイ岳ジオパーク推進協議会会長 様似町長）、小嶋 仁（協議会副会長 様似町教育委員会委員長）、谷村利幸（アポイ岳ファンクラブ会長）、工藤 仁（様似町商工会長）、小林弥生（アポイ岳ファンクラブ事務局長）、久野俊昭（様似町観光協会会長）、新井田清信（学術顧問・アポイ岳地質研究所所長）、水野洋一（認定ガイド・アポイ岳ファンクラブ理事）、島田哲也（新ひだか町静内小学校）、長谷川健吾（様似中学校）、川原千穂（様似中学校）、地元の漁師の方、下條登喜夫（花蕊水産代表取締役）

視察地

様似町観光案内所、エンレム岬、アポイの鼓動、様似町中央公民館、アポイ山荘、ビジターセンター、日高衝上断層露頭、大正トンネル

現地審査まとめ

アポイ岳ジオパークは、様似町長を会長に、行政、学術関係者、商工会、観光協会、および民間団体から構成された協議会によって事業が推進されている。専門知識を持った学芸員が採用されたり、町の長期計画の中にジオパークが盛り込まれるなど、持続可能な運営体制が生まれつつある。発地における精力的な営業活動や、「ふるさとジオ塾」などのすぐれた社会教育事業の結果、ジオパーク目当ての訪問客が増えるなど、ジオパークの認定によって町は変化しつつあり、それを地域振興に活用しようとする住民も出現しはじめた。地域内には十分な数の説明板や案内標識が設置されているほか、ビジターセンターなどの拠点施設やガイドブック、パンフレット、公認ガイド、オリジナルのお土産品など、受け入れ態勢も整備されつつある。

その一方で、現在整備されている説明板やガイドブック、パンフレットは専門用語が多用されるとともに、内容も高度で、地域住民や観光客をジオパークから遠ざけている。今後は、他のジオパークの情報発信事例を参考にしながら、プレートとの衝突に起因する大規模な地殻変動が、アポイ岳周辺の高山植物群や、アイヌの時代からの歴史・文化、そして現在の暮らしと、深い関わりがあることを伝えるストーリーを構築し、地域の価値と魅力を楽しく、正しく、わかりやすく伝えていく努力が求められる。

1) ジオサイトと保全

国の天然記念物にも指定されているアポイ岳の高山植物については、法的保全のみでなく、官民一体となった実質的な保全活動が続けられている。この素晴らしい取り組みを持続させるためにも、地域の子供たちや若い人を積極的に保全活動に参加させるような仕掛けが必要である。また、国道沿いの日高衝上断層の露頭の一部が見学用に保存されるなど、本来失われていたはず

の大地の遺産が、ジオパークの認定によって保存されつつある。

2) 教育・研究活動

従来の「アポイ岳調査研究センター」に加えて、旧幌満小学校の理科室を改築した「アポイ岳地質研究所」が開設されるなど、研究拠点は充実している。2012年度には様似町内の小中学校でジオパークに関する学習が行われた。また、学術関係者だけでなく、民間企業の職員や漁師、お寺の住職といった住民も“講師”として登壇し、住民同士による地域の魅力の相互発信が行われている「ふるさとジオ塾」という素晴らしい取り組みが、地域住民のジオパークへの理解を促している。しかしながら、住民が地域のジオ的価値を学ぶツールとなる現地の説明板や、ハンドブック、ガイドブックは専門用語が多く、かつ内容が難しすぎて、一般市民や観光客にその価値がきちんと伝わっていない状況にある。

3) 管理組織・運営体制

様似町の総合計画の中で、ジオパークは様似町のまちづくりおよび観光の主要推進事業として位置づけられ、長期的な財源が確保されている。また、グッズの売り上げやジオツアーの参加費がジオパークの事業費として補てんされるなど、持続的な資金運用が進んでいる。さらに平成24年度からは専門知識を有する学芸員も雇用され、財政的にも人員的にも組織の持続性が保証されている。なお、世界ジオパークを目指すにあたっては、外国語に対応できる専門職員の存在が必要不可欠である。

4) 地域の持続可能な発展とジオツーリズム

エージェントを対象としたモニターツアーや着地型旅行ツアーの実施、さらには札幌や千歳市などでの観光商談会やPRイベントへの参加を積み重ねた結果、関西の高校が修学旅行で様似町を訪れたり、団体客がガイドツアーで町中を歩くなどの変化が生じた。地域の商工関係者も、ジオパークの認定の効果を実感している。「ふるさとジオ塾」の受講者の中から「アポイ岳ジオパークガイド」を公認する計画もあり、観光客の受け皿は整いつつある。今後は、特に様似高校の取り組みをジオパークに取り込んでいくことをお勧めする。

5) 国際対応およびネットワーク活動

アポイ岳ジオパークは、糸魚川ジオパークや室戸ジオパークで展開されているジオストーリーとの対比が行える地域である。今後、北海道内のジオパークや、ジオパークの認定を目指している地域との連携はもとより、国内のジオパークとの連携を深めてほしい。

6) 防災・安全

東日本大震災の際には、様似町にも津波が押し寄せ、沿岸地域を中心に大きな被害が生じた。ビクターセンターやパンフレットおよびガイドブックには、この時の被害状況や町が策定した地域防災マップを示すべきである。